

氏名	城戸 貴史 (学籍番号 15DS02)		
学位の種類	博士 (社会福祉学)		
学位記番号	8号		
学位授与年月日	2022年3月10日		
論文題目	先天性心疾患患者とその家族への医療ソーシャルワーク機能に関する研究～先天性心疾患分野の医療ソーシャルワーカーの実践からの考察～		
論文審査担当者	委員長	川向 雅弘	教授
	委員	新宮 尚人	教授
	委員	大友 信勝	教授
	委員	藤田 美枝子	教授
	委員	横尾 恵美子	教授

## 論文要旨

### 1. 研究の目的

本研究の目的は、存命率の向上のなかで、生涯的で総合的な支援の方策が喫緊の課題となっている先天性心疾患 (Congenital Heart Disease : 以下、CHD) 患者とその家族への医療ソーシャルワーカー (Medical Social Worker : 以下、MSW) によるソーシャルワーク機能を明らかにすることである。

### 2. 研究の方法

第1章では、心臓病の子どもを守る会の機関誌等の資料を中心に、CHD患者とその家族の自分たちの生活問題の捉え方と、それを受けて患者会・患者家族会である心臓病の子どもを守る会としての社会との関わり方を分析した。第2章では、量的研究の手法を用いて、CHD分野のMSWの多職種連携のコーディネーターとしての力量と、その力量を向上させる方策を分析した。第3章では、質的研究の手法を用いて、CHD患者のライフステージで生じる生活問題に、MSWがどのように介入しているのかを分析した。

### 3. 結果と考察

第1章では、CHD患者会・患者家族会である心臓病の子どもを守る会の歩みを、1951年から2019年を6期に区分けし、各時期の特徴を捉えた。このなかで、CHD患者の生命に関わる手術費用の助成や法整備については、CHD患者とその家族の自助の会として積極的に活動を展開してきたことを明らかにした。また、CHDだけではなく他の疾患や障害と関連するものは、他団体と連携して活動を展開していたことを明らかにした。しかし、CHD患者の就学など個別性が高い問題については、心臓病の子どもを守る会として組織的な活動を展開することが難しく、CHD患者のライフステージごとに関係する多領域多機関専門職との多職種連携 (およびIPW) で、CHD患者とその家族を支援する体制構築と、そのネットワーク型チームをコーディネートできる専門職の必要性を指摘した。第2章では、本研究対象のCHD分野のMSWの医療介護福祉の連携の良さを測る「医療介護福祉の連携尺度」の平均値は、先行研究で調査対象となった多機関専門職よりも高い傾向であった。しかし、下位尺度ごとの平均値は5段階評価で、すべて3以上であったが、4を超える下位尺度はなかったことから、CHD分野のMSWの多職種連

携の力量は決して高いとはいえず、多職種連携の力量を向上させる方策を検討する必要があることを明らかにした。その方策としては、他の多機関専門職の理解や交流を深めること、地域の多領域多機関専門職とのネットワークを構築することなどが考えられた。ただし、MSWとしての経験年数が5年以下のCHD分野のMSWの場合は、日本医療ソーシャルワーカー協会や日本保健医療社会福祉学会に所属するなどして、まずは、MSWとしての基礎力を向上させる必要性を指摘した。第3章では、MSWが介入するCHD患者とその家族が直面する問題として、【先の見えない不安】、【就園、就学の障壁】、【将来を考える】の3つのサブ・カテゴリー、CHD患者とその家族にMSWを紹介する機能を持つ看護師（助産師）、医師、学校関係者などがMSWを捉える視点として、【制度と生活の専門家】、【地域と病院の橋渡しの専門家】、【制度の専門家】の3つのサブ・カテゴリー、CHD患者とその家族が直面した問題に介入するMSWの方策として、【治療専念的介入】、【集団参加支援的介入】、【情報提供限定的介入】の3つのサブ・カテゴリーの計9つのサブ・カテゴリー、CHD患者のライフステージに応じた《院内組織的ソーシャル・サポート・システム》、《実践知的ソーシャル・アクション》、《情報提供的移行期支援》の3つのカテゴリーが生成された。このなかで、CHD患者の胎児期から20歳までのライフステージで生じる複雑多様、かつ、重層的な生活問題を指摘し、その生活問題に対峙するMSWのソーシャルワーク実践を明らかにした。

#### 4. 結論

CHD患者とその家族がどのように生活問題を捉えてきたのか、また、その生活問題をどのように社会へ働きかけを行ってきたのかを明らかにした。さらに、CHD患者の将来の社会的自立を見据えて、CHD患者のライフステージに応じて関わる多領域多機関専門職による生涯的で総合的な支援体制をコーディネートできる専門職に関する期待を示した。

そして、CHD患者のライフステージに応じて関わる多領域多機関専門職によるネットワーク型チームのコーディネーターの役割がMSWであることを明らかにし、CHD分野のMSWのコーディネーターとしての力量を向上させる方策を示した。

さらに、CHD患者の胎児期から20歳までのライフステージで生じる複雑多様、かつ、重層的な生活問題を指摘し、その生活問題に介入するMSWのソーシャルワーク実践を明らかにした。これらのことは、わが国の喫緊の課題であるCHD患者の生涯的で総合的な支援の方策に向けて大きく寄与したものであると考える。

#### 5. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、まず、心臓病の子どもを守る会を対象としたことから、心臓病の子どもを守る会に所属していないCHD患者とその家族の意見が反映されていない。よって、本研究の結果を、CHD患者とその家族全般としてすぐにあてはめることは困難である。また、コロナ禍のなかで、移動が制限されたことや慢性疾患を持つCHD患者に直接会うことが難しい状況もあったことから、CHD患者やその家族、そして、心臓病の子どもを守る会の運営に尽力してきた人物などへのインタビュー調査を行えていない。

次に、本研究の対象のMSWは、日本小児総合医療施設協議会会員施設および日本成人先天性心疾患学会認定修練施設のCHD分野のMSWとしたため、本研究の結果をCHD分野のMSW全般にあてはめ

ることは困難である。

今後の課題は、CHD患者とその家族の生活問題をより明確に把握し、それらの問題解決へ少しでも役に立てるよう、さらなる医療ソーシャルワーク機能の実態把握とその発展の研究を続けていくことである。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、先天性心疾患（Congenital Heart Disease：CHD）患者に対する医療ソーシャルワークの実践を詳らかにし、求められるソーシャルワーク機能を実証することにある。

そのための研究方法として、まず、患者家族会の活動の歴史を通してCHD患者・家族が抱える生活問題を浮き彫りにした。その上で、CHD分野のMSWの多職種連携のコーディネーターとしての力量とその力量を向上させる方策を分析し、CHD患者のライフステージで生じる生活問題に、MSWがどのように介入しているのかを分析した。その研究プロセスを通して、「院内組織的ソーシャル・サポート・システム」「実践知的ソーシャルアクション」「情報提供的移行期支援」という3つのソーシャルワークが実践の柱であることを明確にした。このように実践を理論化した研究の成果は、実証研究の蓄積に乏しい先天性心疾患患者のソーシャルワーク実践現場に実践理論を提供するものであり、多大な貢献を果たすものと評価できる。

他方、本研究は、研究対象としたCHD患者に固有の属性があり、CHD患者とその家族全般としてあてはめることが困難である点、また、特定機関に所属するCHD分野のMSWを研究対象としている点等において課題・限界を残していることも事実である。この点については、今後さらなる実践と研究を進展させることに期待したい。また、本論文にはいくつかの要修正箇所が指摘されたが、いずれも軽微な内容であり、すべての修正が可能であることを確認した。

全体を通して、本論文の研究論文としての完成度は高く、本学の社会福祉学領域の博士論文に求められる水準を十分に満たしていると評価し、博士学位（社会福祉学）を受けるにふさわしいと判断し、合格との結論に至った。